山と博物館

第40巻 第5号 1995年5月25日 大町山岳博物館

引っ越しで考えたこと

扇田 孝之

私ごとで恐縮だが、築十九年の拙宅に手を入れることになった。そこで、四月から近くの別荘を借りている。

この別荘は、十数年前、木の伐採、皮剥きから組み立てにいたるまで持ち主と僕の二人で造り上げたログキャビンで、思い出深い建物なのである。

築場（大町市郊外）近くの山林から伐り出した唐松を、地元の森林組合で二十㌢の太鼓挽きにしてもらい、ひたすら積み上げていくという素朴な工法である。

ところで、この小屋の電気容量は十五アンペアである。当時でも、工事屋さんから二十アンペアにしておいたらと言われたが、僕たちは〝シンプルライフ イズ ベスト〟ということで最小容量にしたのである。そこで、我が家でも〝必要最小限〟の電気器具を持って引っ越すことにした。

大型冷蔵庫、炊飯器、洗濯機、テレビ、ステレオ、炬燵、ビデオデッキ、トースター、電子レンジ、ラジカセ、ワープロ、コーヒーメーカー、ストーブ、電気スタンド……。引っ越した第一日目、たちまちブレーカーが落ちてしまった。数日で、家族のスムーズな生活は、十五アンペアでは成り立たないことが明白になった。

三十アンペアの増量工事が終わった夜、我が家は、これまで通りに電気器具を使いだした。僕は、電子レンジで燗をつけた日本酒を飲んでいる。家人はコーヒーをいれている。子供はラジカセを聞きながら本を読んでいる。

昭和三十年代、十アンペアが当たり前だった。つい最近まで二十アンペアもあれば事足りていたはずだ。

今回の引っ越しで、利便性に慣らされ、無原則に電気器具を増やし、エネルギーを無意識に浪費している恐ろしさに、僕は気づかされた。地球が汚れていくわけである。

（地域社会研究家）

ホオノキ 新緑 撮影 峯村 隆

自然や山登りを楽しむ青少年の育成を

～中学校の集団登山に思う～

栗林良裕

例年五月に入ると県下の中学校から、集団登山についての問い合わせや、事前指導の依頼を数多く受ける。多くは指導にあたる先生の「私は登山が苦手なもので…」「学校行事としてやらなくてはならないので…」といった少なからず集団登山に意欲的でない気持ちがどこかに潜んでいる声である。

中学校の集団登山は明治以来脈々と続けられている、長野県の学校教育における伝統的な学校行事である。新田次郎氏の小説「聖職の碑」には集団登山のあり方をめぐって、団体行動や鍛練を重んじる学校長と、当時いわゆる白樺派と称された若い教師たちとの間で生じた軋轢が描かれている。今日まで脈々と続けられてきた長野県の中学校集団登山には、当然その時代々々を背景とした集団登山のねらいがあり、実施の形態があったものと推測される。

ところで今日、若者の登山離れということがささやかれる一方、中高年の登山者が目立って増加している。このような現象を引き起こした社会的な背景についてはさまざまに論ずることはできるが、現在各校で実施されている中学校集団登山にもそれなりの事象を認めることができる。

そのひとつが今の中学生は、山に憧れたり登山に興味関心を示すということが極めて少なくなっているのではないかということである。集団登山の事前指導を依頼され、学校訪問をさせていただいたおり、まず最初に子どもたちに手を挙げてもらって、集団登山に対する意欲を聞くことにしている。その結果は概略次のとおりである。

「登山を楽しみにしている子」―約一割、「登山に行きたい気持ちはあるが心配なことがある」―約二割、「できれば行きたくない」―約七割　挙手による調査であるので、子どもたちの正直な気持ちが正確に表れているかどうかとの懸念もあるが、どこの学校でもおよそ同様の結果である。

さらに詳しい実態を知るために、長野県山岳総合センターでは、「長野県中学校集団登山研究協議会」に参加していただいた中学校の先生方のご協力を得ながら十七校、一八三〇名の生徒にアンケートによる調査を行った。アンケートの質問内容は次のとおりである。

①登山に行くことをどう思っているのか（登山実施のおよそ一週間前に調査）

a、楽しみにしている。b、行きたいが心配。c、行きたくない。d、どちらとも言えない。

②登山を終えてどう思っているか（②と③は登山を実施した一週間後に調査）

a、楽しかった。b、楽しくなかった。c、どちらとも言えない。

③これからも登山を続けるか

a、続けていきたい。b、機会があればする。c、やらないと思う。

併せて①のaでは「楽しみにしていること」「楽しかった勉強」①のbでは「心配なこと」①のc―「行きたくないわけ」②のa―「楽しかったこと」②のc―「楽しくなかったわけ」を具体的に記入してもらった。

次に示すグラフは十七校を集計したものである。

全体的に見ると事前指導の段階では約二割の生徒が集団登山に意欲を示しているだけである。「行きたいが心配」と答えた生徒を「集団登山に参加することに関心を示している」と解釈して加えても四割強の生徒が興味をもって、事前の学習に取り組んでいるに過ぎない。半数以上が「行きたくない」あるいは登山に興味を示していない。

登山を終えての生徒の感想では、四割強の生徒が「楽しかった」と答えているが、この結果は登山に興味を示した生徒の割合とほぼ一致している。半数以上の生徒が「楽しくなかった」、あるいは特別な感動を得ることもなく学校行事としての集団登山を終えている。この割合は、登山に興味を示さなかった生徒の割合ともほぼ同じである。

さらに、今回の登山の経験を今後の自分にどう取り入れていくかについては、積極的に登山に取り組んでいこうとする生徒が三・五パーセント、「機会があればするだろう」という消極的だが興味を示した、と解釈できる生徒が五十四・二パーセントである。

中学校集団登山をとおして、取り組む姿勢に差はあるものの約六割の生徒が、これからの人生に何らかの形で山登りを取り入れていこうとしていることが伺える。一方、四割の生徒にとっては今回の集団登山の体験だけが生涯唯一の山登りとなる可能性を示唆している。

次に、今回の調査中もっとも登山に意欲を示した学校と、反対に意欲的でない生徒の多

集計 17校 1,830名				
	〔登山に行くことをどう思っているか〕			
	a 22.2	b 21.3	c 11.4	d 45.1
	〔登山を終えてどう思っているか〕			
	a 41.7	b 7.8	c 50.5	
	〔これからも登山を続けるか〕			
	a 3.5	b 54.2	c 42.3	

かった学校のグラフとその理由を掲げてみたい。

・登山に高い意欲を示したE中学校

集団登山に多くの子が意欲を示したE中学校はいわゆる山間地の小規模校である。この学校では隔年で一、二学年合同で登山を実施している。二つの学年を合わせても二十二名という少人数での学習や行動が、友達とのより強いかかわりや信頼感を生み、心の通いあう登山が実施されたのではないかと推測する。

また、ここの生徒は学校から自分たちの登る山を望むことができ、登山に対する憧れや、夢が普段から育まれていたものと思われる。この学校の生徒たちにとっては、体力づくりのために学校の回りを歩いたり、歩き方の勉強をすることも楽しい事前学習だったようである。

E中学校 山間地岳生				
〔登山に行くことをどう思っているか〕				頂上に着く感動を味わいたい みんなで楽しく山に登ること 御来光を見たい　雷鳥を見たい 雲海を見たい
a 77.3	b 18.2	d 4.5		
〔登山を終えてどう思っているか〕				御来光が見れた　友達と楽しく登れた 高山植物が見れたこと きれいな山が見れた　雪解け水に触れた 雷鳥が見れた
a 100				
〔これからも登山を続けるか〕				
b 95.5	c 4.5			

・登山に意欲を示す子が少なかったG中学校とA中学校

あまり意欲的に取り組むことができなかったG中学校は山麓にあり、いってみれば〝ふるさとの山〟ということができる山で集団登山を実施している。普段から身近にある山ということが却って登山の意欲をそぐ結果となっているとの見方もできる。生徒の中には「山に登っても何も役に立たない」「団体行動がきらいだ」「つまらないし、めんどうだ」という声もあった。

同じくあまり意欲的に取り組むことができなかったA中学校は市街地の大規模校である。登るのが大変だろうと考えたり、疲労を嫌う傾向が顕著である。登山という経験が初めて、

G中学校 平坦部岳生 白馬ガ 2年 109名				
〔登山に行くことをどう思っているか〕				最後まで登れるか体力が心配 高山病・ケガ・落石・転落 面倒・山に登っても何も役に立たない みんなについていかれない
a 4.6	b 13.8	c 17.4	d 64.2	
〔登山を終えてどう思っているか〕				疲れた 楽しむものが無かった
a 26.6	b 7.3	c 66.1		
〔これからも登山を続けるか〕				
a 6.4	b 41.3	c 52.3		

ということや荷物が重いこと、さらに「風呂に入れない」ということを登山に行きたくない理由にあげている子もいた。

その他に、子どもたちが登山に意欲を示すことが少ない理由はどこにあるのだろうか。

一つに子どもたちを取り巻く環境が考えられる。近年、日本の社会においては、著しい文化文明の発達に伴って、多くの労働は機械にとって代わり、特に肉体的な労働は大幅に軽減されるようになった。それに伴い人々の内に、体を動かすということを厭うような感情が大きく育ってきた、ということが言えると思う。その結果、汗を流すことの心地よさや快適なことを味わうことが少なくなったということである。さらに、機械文明の発達と機械が人間に代わって能率よく仕事をするようになった結果、多くの余暇時間が生まれた

A中学校 市街地岳生 市街ガ 2年 164名				
〔登山に行くことをどう思っているか〕				最後まで登れるか，落石や雪渓が怖い 体力に自信がない 他の人に迷惑をかけたくない
a 8.5	b 22.6	c 17.1	d 51.8	
〔登山を終えてどう思っているか〕				
a 17.7	b 9.8	c 72.5		
〔これからも登山を続けるか〕				
a 3.6	b 48.2	c 48.2		

が、それを生かす余暇の利用のし方も、体力や技術を必要とせず、手軽に楽しさを味わえる内容へと変化しているように思われる。工夫や努力、忍耐に費やす時間は大幅に削る一方、容易に楽しむための時間は増大しているように考えられる。このような現代人の余暇利用の傾向は、子どもたちの生活にも及び、外で体を使って遊ぶことや、野外に出て直接自然とふれあう機会が減少する要因になっていると言えよう。体を使い、汗を流して活動することが少なくなった子どもたちにとって、ザックを背負い山道を辿る登山は想像しただけで苦手な感情を生じさせるものである。しかし、一方自然を愛し、登山を趣味としている者にとっては肉体的な苦痛や困難があっても、それをさらに上回る素晴らしさ、喜びを実感しているのである。

現在、県下の中学校の集団登山において意欲的に取り組めない子どもが多いということへの対策として、子どもたちの登山についての受け止め方を変えていく手立てが必要であると考える。すなわち、登山のとらえが、しばしば報道で取り上げられる山岳遭難の怖さや、厳しい肉体的な苦痛を伴う活動であるという想像の段階に停まらず、登山のもつ魅力や楽しさが想像できる場を設けることが大切である。勿論、登山には危険や困難、苦痛が伴うことは事実であるが、それらを乗り越える努力や工夫もあることを理解し、自然とのふれあいや山登りに楽しい夢や希望、とりわけ憧れを持たせることが大事な方策になるものと考える。

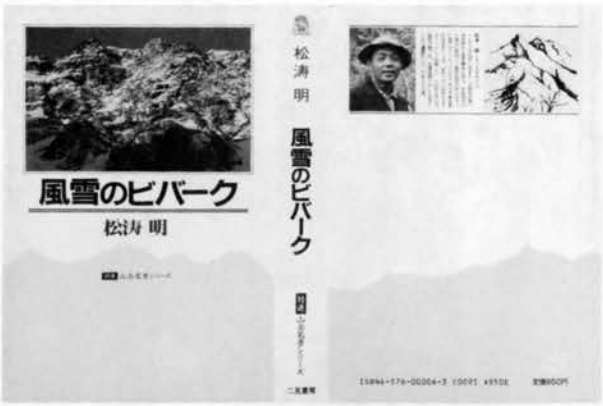
（長野県山岳総合センター　専門主事）

松濤明と有元克己
―登山家の友情―

堀井正子

今年は「戦後五十年」。一つの節目の年だけに、戦後間もない二十四年の一月に、北鎌尾根を滑落した松濤明と有元克己のことを思い出してもいいのではないだろうか。

二人は冬の北鎌尾根を突破して槍、穂高、焼への縦走を、二人だけの力で試みようとしていた。登山装備も現在とは比較にならぬほど劣悪な中で、それでも山は全部自分で背負って登らなければ山じゃないと考えた若者だった。長期にわたる冬山の装備や食料を全部担いで登るのは容易なことではない。サポート隊を使って荷運びをしてもらうのは常識だったのに、二人は自力登山にこだわった。まず松濤が先発して、一度では運びきれない荷物をしょいあげる。雨にぬれず風雪に飛ばされない格好の場所を探して、いくつかの場所に保存しておく。そうしておきながら、それでもまだ足りなかったのだろう。仕事を終えた有元が合流して、二人そろって北鎌尾根にとりついてからも、松濤は荷物を背負って往復している。一度ですむ行程をもどってまた登り直す。信じられない愚直さである。



しかし、天は彼らに味方してくれなかった。季節外れの雨が降って、それから風雪がやってきた。ぬれたテントを放棄して出発した二人は風雪の中を、簡易テントと雪洞でしのぎ、しのぎきれずに有元は千丈沢へ滑落。松濤は後を追った。

有元に登り直す体力は残っていない。湯俣まで下っていく体力もない。松濤にも有元を背負って、胸まで埋まる雪を下る体力はもうない。松濤は岐路に立たされた。一人で救援隊を呼びに下るか、それとも友のそばにとどまるか。もし、有元に救援隊をつれてもどってくるまでの体力を残っていたら、松濤もちゅうちょなく下ったであろう。しかし、疲労困ぱいした彼にその可能性はない。松濤は有元とともに死ぬ決意をする。

サイゴマデ　タタカフモイノチ　友ノ辺ニスツルモイノチ　共ニユク

死を覚悟した松濤は登山記録をつけてきた手帳に遺書を書きはじめる。やさしい母に何の孝養も尽くせずに死ぬのは罪でなくてなんであろう。許して下さいと呼びかけずにはいられない松濤の手は凍傷で自由にならない。大きな大きなカタカナで、紙をめくれば一度に何枚もめくれてしまう。そうやって、松濤は母に呼びかけ、世話になった先輩に呼びかけ、友人に、弟たちに、最後の別れを告げていった。

全身硬ッテ力ナシ　何トカ湯俣迄ト思ウモ有元ヲ捨テルニシノビズ、死ヲ決ス

オカアサン

アナタノヤサシサニ　タダカンシャ

一アシ先ニオトウサンノ所ヘ行キマス

何ノコーヨウモ出来ズ死ヌツミヲオユルシ下サイ

だが、死を待つのは苦しい。

有元ト死ヲ決シタノガ　六時　今　一四時仲々死ネナイ　漸ク腰迄硬直ガキタ、全シンフルヘ、有元モＨＥＲＺ、ソロソロクルシ、ヒグレト共ニ凡テオワラン

苦しくても乱れずに、最後まで死を見つめ続けた若者の力はどこから生まれたのだろうか。仏の教える輪廻を信じにくい現代に生きていても、大自然の山にいどむ若者は食物連鎖を夢みられたからだろうか。

我々ガ死ンデ　死ガイハ水ニトケ、ヤガテ海に入り、魚ヲ肥ヤシ、又人ノ身体を作ル、個人ハカリノ姿　グルグルマワル

（原文のまま）

雪に埋もれた二人は懸命の捜索にもかかわらず、なかなか見つからなかった。雪がとける夏が来た。それからようやく二人が発見された。荷物がばらまかれていて、たどっていくと岩陰にしっかりとはさまれた手帳があった。松濤は有元の手にもエンピツをにぎらせていた。有元の最後のメッセージも同じ手帳にしっかりと残されていた。

（近代文学研究家）

博物館だより

平成7年度5月以降の企画展予定

○フォトサークル風の詩の会写真展―「花と光と風達よ」

6月4日(日)～6月18日(日)　山岳写真60点

○「動物写生画展」

7月1日(土)～7月9日(日)　5月5日に行われた写生画会参加者の作品を展示

○「小林政紘　山の花展」

7月23日(日)～8月20日(日)　草花画50点

○「北アルプス讃歌」―日本山岳写真協会松本支部展―

9月1日(金)～9月17日(日)　山岳写真60点

○「秋の草花とキノコ展」

9月22日(金)～9月24日(日)　野草生け花30点・キノコの液浸と生の標本各約100点

○「山川勇一郎スケッチ展」

10月10日(祝)～11月5日(日)　油彩10点　スケッチ水彩70点を展示

山と博物館第40巻第5号
一九九五年五月二十五日発行
発行所　〒398 長野県大町市　大町山岳博物館　TEL(0261)22-0211
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一、五〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇―七―二三九三